

|       |    |       |                                    |
|-------|----|-------|------------------------------------|
| 19    | 安城 | 新田小学校 | 名前 <small>シミズ ナツミ</small><br>清水 夏海 |
| 分科会番号 | 20 | 分科会名  | 総合学習                               |

研究題目

根拠をもって自分の思いや考えを伝え、相手の立場に立って自分にできることを  
実行しようとする新田っ子の育成

－ 4年「お年寄りと心をつなげよう ～サークル オブ ハート～」の実践を通して－

## 1 主題設定の理由

本学級の児童は、活動的で新しい物事に興味を示し、疑問に思ったことを自分で調べたり、友達や先生に聞いたりして、自分の考えを書く姿が見られる。しかし、自分の意見や考え、気付きに自信がないため、発表したり、友達に伝えたりすることや考えることを諦めてしまう児童も多い。自分の意見を伝えることを得意とする児童も、根拠のある発言は少なく、主観的な発言が多い。そして、自分の思いや考えが明確になっていなかったり、根拠を問われても「なんとなくそう思った。」や「多分そうだと思う。」と答えたりする。そこで、本実践では、児童の「知りたい」「なぜ」などの思考の流れを大切に、体験的な活動を取り入れながら学習を進めることで、「見たもの」「聞いたこと」「感じたこと」を根拠にして自分の思いや考えを伝えることができるように単元構想を工夫する。そして、児童が高齢者と関わる活動を通して分かったことを伝え合う活動では、「見たもの」「聞いたこと」「感じたこと」を根拠に伝えることができるように、学びの足跡を掲示する。児童の思考の流れを大切に体験的な活動を繰り返し取り入れたり、学びの足跡をもとに自分の思いや考えを伝え合う場を設定したりすることで、「見たもの」「聞いたこと」「感じたこと」を根拠に、自分の思いや考えを伝える児童の姿に期待したい。

現代社会では少子高齢化が進み、児童の周りにも高齢者が増えてきている。児童にとって身近な高齢者と言えば、自分の祖父母やスクールガード、自分の家の近くのスーパーや商業施設に來ている人など地域に住む高齢者である。だが、高齢者といっても年齢や体の状態は様々で、日常生活を送るのに苦労している高齢者もいる。実際に、児童は上記のような高齢者と関わったことはあまりないようである。そのため、高齢者を助けたい、高齢者の力になりたいという思いはあっても、自分に何ができるのか明確になっていない児童が多い。また、本学級の児童は、友達に対して優しく接することができ、困っている友達がいると積極的に声をかけ、助けようとする姿が見られる。しかし、相手が手伝ってほしいことや困っていることを聞かずに、相手が自分でできるところまでやってしまうことも多い。そこで、本実践では、高齢者のために活動する福祉センターやデイサービスの方やカフェを開く町内会長の思いを聞く場を設定したり、児童が企画・開催する交流会を行ったりすることで、相手の立場に立って考え、自分にできることを実行しようとする気持ちを高める姿に期待したい。

本実践では、児童の思考の流れを大切に体験的な活動を進める中で、児童が根拠をもって自分の思いや考えを伝えたり、相手の立場に立って考え、自分にできることを実行しようとする気持ちを高めたりすることを願い、本主題を「根拠をもって自分の思いや考えを伝え、相手の立場に立って自分にできることを実行しようとする新田っ子の育成」と設定した。

## 2 研究の構想

### (1) 目指す児童の姿

研究主題に迫るために、以下の目指す児童の姿を設定した。

- ① 根拠をもって、自分の思いや考えを伝えることができる児童
- ② 相手の立場に立って考え、自分にできることを実行しようとする気持ちを高める児童

### (2) 研究の仮説と手立て

上記の目指す児童の姿に迫るために、次のような仮説と手立てを考えた。

【仮説1】見学やインタビューなど体験的な活動を取り入れたり、学びの足跡の掲示をもとにして、自分の思いや考えを伝える場を設定したりすれば、「見たもの」「聞いたこと」「感じたこと」を根拠にして自分の思いや考えを伝えることができるであろう。

手立て①：児童の「知りたい」「なぜ」などの思考の流れを大切にし、体験的な活動を取り入れる。

手立て②：学びの足跡をもとに自分の思いや考えを伝える場を設定する。

【仮説2】高齢者のために活動する人の思いを聞いたり、交流会を開くために意識する視点をもって会を計画、開催したりすることで、高齢者や高齢者を支える人の思いや願い、高齢者の不自由さや不便さに気づき、自分にできることを実行しようとする気持ちを高めるであろう。

手立て③：高齢者のために活動する福祉センターやデイサービスの方やカフェを開く町内会長の思いを聞く場を設定する。

手立て④：交流会を開くために意識する視点を与える。

手立て⑤：体験したことを生かす場や新たに自分にできることを知る機会をつくるために交流会を開く。

### (3) 仮説の検証方法

抽出児A（以後Aと表す）を設定し、その変容を追うことで仮説の妥当性の検証を行う。

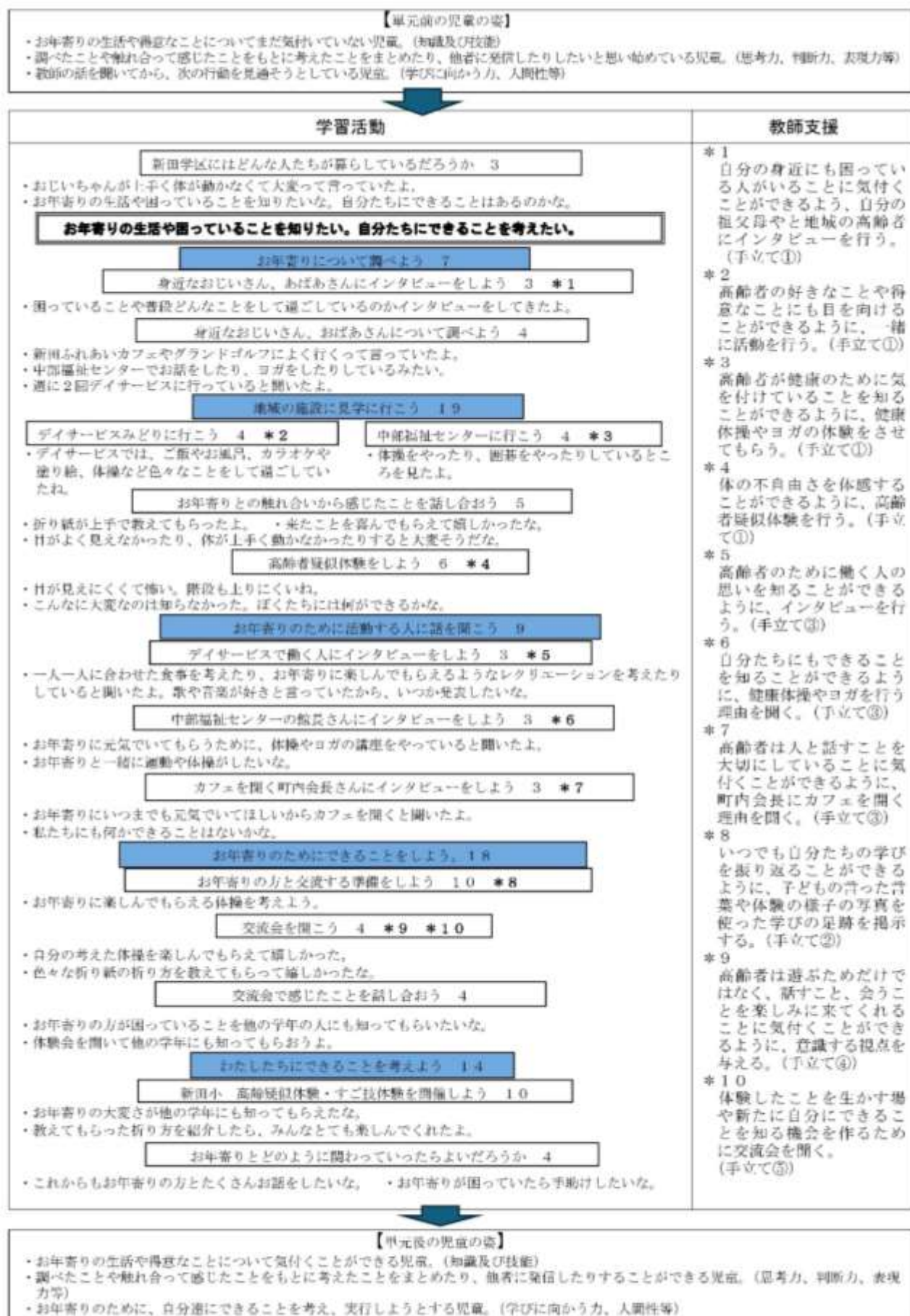
#### 【抽出児Aについて】

Aは、学習に対して問題解決をしようと意欲的であり、自分の考えを、ワークシートやノートに書き、発信することができる。しかし、根拠を問われても「なんとなくそう思った。」で終わってしまい、答えられないことが多い。また、Aは相手のことを思って動くことができるが、相手が手伝ってほしいことを聞かずに、相手が自分でできるところまでやってしまう。

そこで、本単元では、体験的な活動を通して、「見たもの」「聞いたこと」「感じたこと」をもとに根拠をもって自分の思いや考えを伝えられる姿になることを期待したい。また、高齢者と交流することで、相手の立場になって考え、自分にできることを実行しようとする姿になることを期待したい。

## 3 研究の実践と結果

### (1) 単元構想図



## （２）児童の思考の流れを大切にしたい体験的な活動（手立て①）

単元の導入では、身近な高齢者について知っていることを出し合い、「高齢者はどのような生活をしているのだろう」という疑問をもった。そこで、祖父母や地域の高齢者へのインタビューを行うと、一人一人の生活や過ごし方が異なることに気づき、「もっとたくさんのお年寄りの生活を知りたい。」という思いが高まった。

その後、デイサービスや福祉センターを見学し、高齢者が健康づくりや交流を楽しみながら生活していること、人の支えを受けながら生活している人もいることを学んだ。また、お手玉やおセロなどを通して交流する中で、高齢者にも得意なことや好きなことがたくさんあることに気付くことができた【写真１・２】。Aは、「もっとたくさんのお年寄りと話したい」と振り返り、「見たこと」「聞いたこと」「感じたこと」をもとに自分の思いを伝える姿が見られた。



【写真１・２】 デイサービスでオセロやお手玉を高齢者で行う様子

さらに、高齢者疑似体験では、重りや杖、視野が狭くなるゴーグルを用いて、高齢者の身体的な不自由さを体験した【写真３】。Aは、「これからは、おじいちゃんの荷物を持ってあげたり、かいだんで手すりのほうをあけたい。」と振り返ったことから、「感じたこと」を根拠に自分の思いや考えを伝えることができたと言える。



【写真３】 高齢者疑似体験を行う児童

このように、インタビュー活動、デイサービス・福祉センター見学、高齢者疑似体験など、児童の「知りたい」「なぜ」などの思考の流れを大切にしたい体験活動を行うことで、「見たもの」「聞いたこと」「感じたこと」を根拠にして自分の思いや考えを伝えることができたと言える。

## （３）学びの足跡をもとに自分の思いや考えを伝える場の設定（手立て②）

体験活動を通して、児童が高齢者との交流会を開きたいという思いをもったため、交流会を開くことにした。交流会を行うにあたり、高齢者と行いたいことや開催する上で気を付けなければならないことを話し合った。児童が体験活動で感じたことや体験活動後に自分の思いや考えを伝えた授業の内容、体験活動の様子の写真等は、学びの足跡として掲示した。いつでも見える場所に学びの足跡の掲示があることで、前時までに話し合った内容や気付いたことをもとに発言する児童が増えた。

交流会での活動内容を考える授業でAは、「色々迷ったけれど、風船バレーがやりたい。」と発表した。Aに「風船バレーにした理由はありますか。」と意見の根拠を問うと、学びの足跡を見ながら、「高齢者疑似体験で体が重たくてすばやく動けないことが分かったから、風船バレーなら誰でも楽しめる。」と答えた。そして、互いの活動をやってみてアドバイスをする授業でも、Aは学びの足跡で自分が高齢者疑似体験で活動している写真を指さしながら、「このとき、手が動かしにくかったから、もっと簡単なものにするか、難しいところを手伝うといいと思います。」と発表した。

このように、学びの足跡を掲示することで、いつでも自分の学びや考えを振り返ることができ、「見たもの」「聞いたこと」「感じたこと」を根拠に自分の思いや考えを伝えることができたと言える。

#### （４）高齢者のために活動する人の思いを聞く場の設定（手立て③）

デイサービス見学では、職員へのインタビューを通して、職員が高齢者一人一人に合わせた支援や安心して過ごせるよう工夫していることを学んだ。Aは、「体によい食べ物を調べて、おじいちゃんに教えてあげたい。」と振り返り、高齢者のために自分にできることを考えるようになった。福祉センターでは、館長から高齢者が健康で楽しく過ごせる場づくりへの思いを聞き、Aは「私もお年寄りが元気でいられるような遊びや運動を考えていっしょにやりたい。」と発言した。さらに、町内会長へのインタビューでは、ふれあいカフェが高齢者の交流や健康づくりにつながっていることを知り、「自分たちも高齢者と遊んだり話したりできる会を開きたい。」と考えるようになった【写真４】。

デイサービス、福祉センター、町内会長へのインタビューを通して、自分にもできることがあるかもしれないという気付きから、「交流会を開きたい。」という実行しようとする姿へと変わっていった。これらのことから、高齢者を支える様々な立場の人の話を聞くことで、自分たちにできることを実行しようとする気持ちを高めることができたと言える。



【写真４】町内会長へのインタビュー

#### （５）交流会で意識する視点を与える（手立て④）

交流会の計画では、児童は高齢者に楽しんでもらいたいと考えながらも、自分たちがやりたい活動を優先する姿が見られた。そこで、教師が「高齢者は何を楽しみに交流会へ来るのだろう」と問いかけると、Aは、「自分たちと話すことや会うことを楽しみに来てくれると思う。」と考え、「話すことを楽しみに来てくれているなら、笑顔でいられるようにしたい。」と発言した。交流会当日は、計画通りに進まない場面もあったが、児童は相手に合わせた話し方をしたり、やりたいことを尋ねたりするなど、その場に応じて関わり方を工夫した。Aも、風船バレーの後に高齢者と会話を楽しみ、学校生活や自分のことを話したり、昔の話を熱心に聞いたりする姿が見られた。このように、意識する視点を与えることで、高齢者のためにできることを実行しようとする気持ちを高めることができたと言える。

#### （６）交流会「新田ふれあい祭り」の開催（手立て⑤）

今までの学習をもとに、高齢者と交流する場として「新田ふれあい祭り」を開催した。児童は、それぞれが用意した遊びを通して高齢者と交流した。気付いたことや感じたことを伝える授業で、Aは「昔の給食について教えてもらった。色々なことを詳しく知っていて驚いた。」と発言した。交流会前は、足が思うように動かない、文字が見えにくいなど、高齢者の苦勞に目が向いていたが、交流会後には、高齢者の素敵な部分にも気付く姿が見られた。振り返りでは、「今度は、お年寄りから昔の遊びや好きな遊びを教えてもらい、一緒にやりたい。」と書いた。また、交流会で学んだことを伝えたいという思いから、学習発表会を行った。発表内容を考える授業で、Aは「相手に困っていることを聞くのが大切かもしれないね。」と話した。このように、「新田ふれあい祭り」を開催したことで、高齢者の立場になって考え、自分たちにできることを実行しようとする気持ちを高めることができたと言える。

## 4 仮説の検証

### (1) 仮説1の検証

手立て①「児童の『知りたい』『なぜ』などの思考の流れを大切にし、体験的な活動を取り入れる。」を通して、Aは自分の祖父と友達の祖父の違いに気付き、もっと他の高齢者のことも知りたいという思いをもって、体験活動に取り組んでいた。活動中も、疑問に思ったことや知りたいことは積極的に聞く姿勢が見られたため、体験活動を行うことでAの思考の流れを大切に活動を行うことができたと考えられる。また、活動後の話し合いの場では、自分が実際に見聞きしたり体験したりしたことをもとに、次にしたいことややってみたいことを提案するなど、根拠をもって自分の思いを発言する姿が多く見られた。

手立て②「学びの足跡をもとに自分の思いや考えを伝える場を設定する。」によって、話し合いの場で発言の根拠を問われると提示されている学びの足跡を見て理由を説明するなどして話し合いをする姿が見られた。Aは本単元を通して、発言をする際にただ自分の意見を伝えるのではなく、自分の「見たこと」「聞いたこと」「感じたこと」を踏まえ、それを根拠に発言をすることができるようになった。したがって、仮説1の有効性は検証されたと考える。

### (2) 仮説2の検証

Aは体験活動を行っていく中で、高齢者に対して大変そうという思いをもっていた。しかし、手立て③「高齢者のために働く福祉センターやデイサービスの方やカフェを開く町内会長の思いを聞く場を設定する。」によって、高齢者の周りで働く人と交流をしていく中で、高齢者に対して自分にも何かできることがあるのではないかという気持ちが芽生えていった。特に町内会長のインタビュー後には、高齢者の好きなことで交流をする会が開きたいという、自分にできることを探して実行しようとする姿が見られた。交流会を開催する際に、手立て④「交流会を開くために意識する視点を与える。」手立て⑤「体験したことを生かす場や新たに自分にできることを知る機会を作るために交流会を開く。」によって、意識する視点を与えた上で交流会を開催すると、交流会中にお年寄りが困っている様子を見て、自分から歩み寄り寄っていき、お年寄りの好きなことを聞く姿が見られた。また、振り返り時には、「今度はお年寄りの好きな遊びを聞いた上で一緒に遊びたい。」という発言があり、自分だけで考えるのではなく、お年寄りに寄り添って一緒に考え、それを実行しようとする姿が見られた。本単元を通して、Aは高齢者を思いやる気持ちだけでなく、自分にもできることはないかを自分の学びから考え、それを実行しようとする気持ちを高める姿が見られた。したがって仮説2の有効性は検証されたと考えられる。

## 5 今後の課題

実践を通して、Aのように相手の立場に立って、思いを傾聴していきたいと思うようになった児童も多くいた。しかし、まだ、「大変だから助けたい」とやってあげたい気持ちが強く、高齢者一人一人を尊敬している姿が見られない児童もいた。また、実行しようとする気持ちはあるものの、自分に何ができるのか具体的にイメージできていない児童も多くいるように感じる。さらに、児童から「〇〇さん」と関わった高齢者の名前が出てくることも数少なかった。

今後は、児童と高齢者がもっと深く関わり、高齢者と関わるのが好きになったり、地域の高齢者を誇りに思ったりできるような単元構想や授業を作っていきたいと考える。